



小児がん看護専門性向上研修が開催されます

2015年1月21日(水)～1月23日(金)、日本看護協会看護研修学校にて「小児がん看護専門性向上研修」が開催されます。詳しくは下記 URL をご覧ください。
<http://www.nurse.or.jp/nursing/education/training/index.html>

内 容	
1/21 (水)	わが国の小児がん対策の動向と看護 小児がん看護概論 小児がん患者と家族へのトータルケアに関する演習Ⅰ 小児がんの病態と治療
1/22 (木)	症状マネジメントⅠ、Ⅱ 家族看護 小児がん患者と家族へのトータルケアに関する演習Ⅱ
1/23 (金)	小児がん看護と社会資源の活用・応用 小児がん看護の継続と多職種連携 ～外来治療から在宅看護～ 小児がん患者や家族の看護に携わる看護師のメンタルヘルス 小児がん患者と家族へのトータルケアに関する演習Ⅲ

小児がん看護専門性向上研修プログラム

SIOP2015のお知らせ

2015年の国際小児がん学会は、2015年10月8日～11日に南アフリカ共和国のケープタウンで開催されます。例年通りであれば、抄録は2月～3月頃が締切になると思います。2014年のSIOPの閉会式でのプレゼンでは、”No Malaria, No Ebola, Safety” と言っていました。ケープタウンは、近代都市ですが近くに自然の多いところのようです。是非、発表、参加しましょう。(国際委員会 小川純子)

第13回 日本小児がん看護学会のご案内

第13回日本小児がん看護学会を、第57回日本小児血液・がん学会、がんの子どもを守る会とともに2015年11月28日(土)、29日(日)山梨の地で開催します。小児がんの子どもたちの将来を含めたサポートについて考える機会とし、地域で暮らしやすい環境の整備に繋がっていくことを期待しています。世界遺産の富士山とアルプスの山々に囲まれた紅葉の美しい季節の山梨にぜひお越し下さい。

第13回日本小児がん看護学会会長

山梨大学大学院成育看護学講座 石川眞里子

＜お詫びと訂正＞

「小児がん看護」9巻1号巻頭言にて『会誌の創刊からあしかけ10年の長きにわたり編集委員長を務められた野中淳子先生』と記述しましたが、初代編集委員長は森美智子先生でいらっしや、4号より野中先生が務めておられました。お詫びして訂正申し上げます。

編集委員長 上別府圭子

〔小児がん看護学会誌編集委員会より〕

本会誌は、毎年9月に発行しております。今年度は通常の会誌を「9巻1号」として発行し、第12回学術集会抄録集を「9巻2号」として発行いたしました。編集委員会では年間を通じて投稿を受け付けておりますが、2015年発行の会誌へ掲載希望の論文は、2月末日までにご投稿ください。それ以降に投稿されたものは翌年に掲載予定となります。会誌やHP (<http://www.jspon.com>) で投稿規定をご確認のうえ、下記事務局までお送りください。皆さまの実践や研究の成果を、お待ちしております。

編集委員会事務局

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻家族看護学分野

FAX: 03-3818-2950 E-mail: ed-office@jspon.com

平成26年度 理事・監事

理事長: 内田雅代

副理事長: 上別府圭子、丸光恵

監事: 小倉美知子、藤原千恵子、森美智子

理事: 石川福江、井上玲子、小川純子、小原美江、
上別府圭子、釘持瞳、塩飽仁、竹之内直子、田村恵美、
富岡晶子、野中淳子、平田美佳、前田留美

平成26年度 組織体制

編集委員会: 上別府圭子、野中淳子、前田留美

将来計画委員会: 内田雅代、上別府圭子、丸光恵、

石川福江、井上玲子、塩飽仁、田村恵美、前田留美

国際交流委員会: 丸光恵、小川純子、平田美佳

ケア検討委員会: 小原美江、竹之内直子、平田美佳

学術検討委員会: 上別府圭子、内田雅代、小原美江、

広報委員会: 小川純子、井上玲子、塩飽仁、田村恵美、

前田留美

合同学会プログラム委員: 石川福江、内田雅代、小原美江

会計: 石川福江、富岡晶子 庶務: 野中淳子

事務局: 岡澄子、米山雅子

事務局: 238-8522 神奈川県横須賀市平成町1-10-1

神奈川県立保健福祉大学 保健福祉学部看護学科小児看護学内

E-mail: office@jspon.com

日本小児がん看護研究会ニュースレター担当

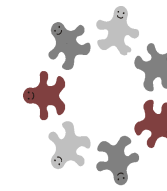
淑徳大学看護学部 小川純子

東海大学健康科学部 井上玲子

筑波大学付属病院 田村恵美

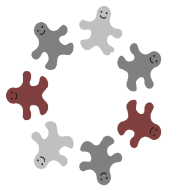
〔連絡先〕 〒260-8703 千葉市中央区仁戸名町673

E-mail: junogawa@soc.shukutoku.ac.jp



NPO 法人 日本小児がん看護学会

Japanese Society of Pediatric Oncology Nursing
 — JSPO —
 News Letter Vol.19



小児がん拠点病院が機能し始めて、まもなく2年が経ちます。この間に全国の6ブロックごとに対策が講じられ、情報の集約化や専門職の育成など、医療の質と環境の整備が急速に進展してきました。また2014年2月には小児がん中央機関が決定し、多くの役割が期待されます。本学会でも小児がんの子どもと家族の療養生活環境が、より向上するよう活動を続けていきたいと思っております。

さて、今回のニュースレターでは、11月29日～11月30日に開催される、第12回日本小児がん看護学会(岡山)のご案内に加え、8月23日の第11回小児がん看護研修会(東京)、10月22日～25日にカナダ(トロント)で開催されたSIOP2014の報告など多彩な内容となっております。これからも充実した皆さまとの交流を楽しみにしています。

第12回 日本小児がん看護学会学術集会のお知らせ

第12回日本小児がん看護学会を日本小児血液・がん学会とがんの子どもを守る会とともに岡山の地で開催させていただくことになりました。テーマは「子どもたちの“生きる”を支える全人的ケア(whole person care)ー子どもと家族の思いに沿った先を見通した移行期支援ー」としました。皆さまのご来福を心よりお待ちしております。

第12回 日本小児がん看護学会会長

岡山大学大学院保健学研究科看護学分野 猪下 光

開催期間: 2014年11月28日(金)
 ～ 11月30日(日)

会場: 岡山コンベンションセンター
 <プログラム>

◆特別講演

1. 若年成人となった小児がん経験者が成人医療へとスムーズに移行するために
 2. 小児がん患児へのケア向上に役立つ technology(I T)
- 演者: Christina Baggott (国際小児がん学会看護部会長)

〔日本小児がん看護学会広報委員会より〕

日本小児がん看護学会では会員のみならず向けに、小児がん看護にかかわる最新情報や、学会・研修会情報をお送りするメールリストを立ち上げました。登録ご希望の方は、

[ホームページ](http://www.jspon.com) (<http://www.jspon.com>) 左側のメールリスト登録バナーをクリック

メールリスト登録者でご希望の方へ、岡山で開催されます第12回学術集会の抄録のpdf版を配布しますので、ご利用ください。(9月までに会費納入がお済みの方に限ります)

◆シンポジウム1

小児がんの子どもと家族にとっての制限
 -あなたの願いをかなえたい-

1. 化学療法中の食事支援
2. 小児がんの子どもとその家族への内服支援
3. セラピードック導入のための取り組み
4. 小児がんの子どもに対する理学療養士のかかわり
5. 小児がん経験者 闘病生活を振り返って

◆シンポジウム2

日本血液がん学会・小児がん看護学会合同シンポジウム
 (共同開催: がんの子どもを守る会公開シンポジウム)
 小児がん経験者が大人になること

1. 「病弱教育」一連続性のある多様な学びの場での教育支援をめざしてー
2. 成人移行期の小児がん患者の心身医学的問題
3. 小児がん経験者が就労を続けられるための工夫
4. 小児がん経験者の性・生殖機能の問題
5. 小児がん経験者のための社会資源・社会制度の現状と課題
6. 小児がん経験者が大人へと成長する過程で向き合う課題

◆ワークショップ

看護で取り組むプレパレーション

1. 低年齢児へのプレパレーション
2. MRI検査時のプレパレーション導入の効果
3. 子どもにとって苦痛の少ないMRI検査時方法は? 覚醒下か? 鎮静下

◆学術交流セミナー

誰でも書ける臨床での実践報告
 病棟におけるグリーンカンファレンスの試み

参加費: 当日受付のみ 看護師 10,000円
 (3学会共通、すべての会場に参加可能)

会員登録: 日本小児がん看護学会事務局

<http://www.jspon.com/>

学会ホームページアドレス:

<http://www2.convention.co.jp/56jspho>

第 11 回小児がん看護研修会のご報告

2014年8月23日(土)に第11回小児がん看護研修会を開催いたしました(於;国立成育医療研究センター)。本年度は、日常臨床の中で患者ケアにならび大きな柱となる『家族ケア』をとりあげ、「小児がん患者の家族へのケアを考える~日頃の家族とのかかわりを振り返ってみよう~」のテーマで、講義とグループワークを行いました。

<講義①小児がん患者の家族アセスメントについて>

東京大学大学院医学系研究科 健康科学・看護学専攻教授 上別府圭子先生より、家族のアセスメントに必要な基礎的な知識として、家族のストレスへの反応(対応)モデル:ダブルABCXモデル/ストレス・レジリエンスモデルの紹介、ジェノグラムとエコマップの作成方法、円環的質問などについてご解説いただきました。

上別府先生より経験症例を提示いただき具体的にこれら理論を当てはめる事で、臨床現場では、アセスメントとケア(看護・介入)が同時に並行して進行する為、今起きている事象に関連させながら、認知・感情・行動の各領域に関して意図的な情報収集が必要であることを学びました。参加者からは、「理論に基づいた介入や認知・感情・行動領域に働きかける問いかけについてとても勉強になり臨床で役立つと考える」「具体的事例を示しながらの説明でありとても良かった」といった感想が聞かれており、改めて『家族看護とは何か』『家族のアセスメントとは』という事を考える契機になったと思われま。

<講義②がんの子どもへの家族への支援の実際>

国立がん研究センター中央病院 小児看護専門看護師 杉澤亜紀子先生より、家族成員に対する援助方法、家族成員間の関係性に働きかける援助方法、家族単位の社会性に働きかける援助方法について、具体的な二つの介入事例を通して実践内容を提示しながらご解説いただきました。

小児看護専門看護師としての実践例を具体的に提示いただいたことで、家族生活の支援と再統合について経過を追って振り返ることができ、参加者からも「症例の経過についてポイントを押さえて提示していただきとても参考になった」「自分で経験した事例と重ね合わせて振り返ることができた」といった感想が聞かれ、実践モデルとして症例を共有する事ができたと考えます。

<グループ別テーマセッション:①父親②母親③きょうだい④きょうだいドナー>

昨年度に引き続き、午後からはテーマ別のグループワークを行いました。

グループワークでは、興味関心別に、父親、母親、きょうだい、きょうだいドナーの4つのテーマにそって、臨床現場での課題と合わせ、各施設での工夫や取り組みなどの情報交換が行われました。各グループともに、家族ケアに関する活発な意見交換を行い、特に他施設での具体的な工夫に関しては、自施設で取り入れられそうな内容も多く、明日からの実践に役立つヒントとして発表内容を共有する事ができました。

また、病院に来ない家族への支援について、施設という枠を超え病院外での家族支援へのニーズへの活動を必要とする発表もあり、今後の家族支援の広がりを示唆するものとなりました。

<研修会全体として>

研修会当日は、非学会員、学生、当日参加者なども含め、合計53名の参加をいただきました。うち37名にアンケートを提出していただきました(回収率69.8%)。集計結果では、講義、グループワークのすべての項目について概ね参加者の満足度は高い結果でした。本研修会を通して、小児がん患者の家族への関わり・ケアを理論と実践の両面より学ぶことにより、自己の基礎能力を高めながら臨床での実践にすぐに役立つヒントを得ることができたと考えます。

次年度の研修会に関しましては現在企画中ですが、皆様からのご意見を参考にニーズに合わせた内容を企画できる様、教育委員会で検討してまいります。

最後に、本研修会開催にご協力くださった皆様に、紙面を借り心より感謝申し上げます。

日本小児がん看護学会教育委員会 一同

第 46 回国際小児がん学会への参加報告

10月22日から25日まで、トロント(カナダ)で開催された第46回国際小児がん学会(SIOP2014)に参加しました。今回は、学会の前に Sick Kids Hospital(トロント小児病院)での2日間の研修を計画し、臨床の看護師7名を含む13名が参加しました。Sick Kidsでは、カナダにおける小児がん看護やきょうだい支援、終末期ケアなどについて、様々な専門家から話を聞くことが出来ました。詳細については、学会誌で報告します。

SIOP2014には、約100国から医師、看護師、臨床心理士、小児がん経験者、小児がん経験者の親など、様々な職種や立場の人が、2000人以上参加しました。看護セッションへの参加者は92か国から約150名、Educational Dayは70名の参加がありました。日本からは、臨床で働

く看護師7名を含む20数名の看護職が参加し、ポスター発表が5題、口演発表が1題でした。

【Educational Day:10月22日(水)】

Educational Dayのテーマは、Initiatives, Innovations, Achievementsでした。Achievementsでした。Initiativesのセッションでは、「看護師同士のケア」「先進国とLow-Income Country(LIC)のプロトコル移行における医療的・文化的な相違の問題」が、Innovationsでは、「子どもにとって最適な場所である家での治療の推進」「家族ケアにおける看護師の役割」について話がされた。さらに、Achievementsでは、「発展途上国における小児がん看護のゴール」「研究の実践との統合」に加えて、「中枢神経系腫瘍の最新治療」「神経芽種への131I-MIBG治療」など、新しい治療についての講義もありました。新しい治療の開発に合わせて看護するためには、看護師も常に新しい治療に関する知識を得る必要があると再認識しました。

【看護セッション】

私は、看護セッションを中心に、心理系のセッションや親の会のセッションにも参加しました。看護セッションは、6つのテーマセッションと、ラウンドテーブル、家族会との合同セッションで構成されていました。看護実践における教育と連携のセッションでは、LICやMiddle-Income Country(MIC)における小児がん看護の実践とSIOP看護チームによるサポートについての発表がありました。サポートケアのセッションでは、「栄養」に焦点をあてた発表が複数あり、小児がんの治療中の子ども達の栄養方法や栄養状態、また小児がん経験者の栄養状態の重要性について活発にディスカッションされていました。栄養の問題は、ラウンドテーブルでも話題に挙げられ、日本はほとんどの治療が入院で行われるため、経口で食事を摂ることが難しい場合の第一選択はTPNになっていますが、治療のほとんどが外来で行われる欧米では、胃管からの注入で、問題となっていることが違うと感じました。

家族会との合同セッションのテーマは、好中球減少の際の子ども世話についてでした。感染予防、隔離によるストレス、在宅における親の役割などについて共に意見交換がされました。看護セッション以外には、痛みの管理における新しい知見に関するシンポジウムや、子どもの権利と意思決定に関する基調講演など、とても興味深い発表が多くありました。国際学会に参加して、改めて日本の看護師の役割の多様性を感じると共に、看護師の専門性をどのように他職種に伝えていくかが、今後の課題であるのではないかと思います。

(淑徳大学 小川純子)



CNS のまめ知識

英国のこどもの緩和ケアと日本の取り組み

英国ではシスター・フランシスが脳腫瘍の女の子「ヘレン」の家族を休ませるため、代わりに看護したことがきっかけとなり、1982年に世界初のこどものホスピス「ヘレンハウス」が創設されました。その後、英国の小児緩和ケア協会は「生命に限りのあるこどもの緩和ケアとは、身体的、精神的、社会的、霊的な側面を包含したケアのための積極的、総合的アプローチである。緩和ケアは、こどものQOLの向上と、家族を支援することを重点的に取り扱い、苦痛症状のマネジメント、レスパイトケアを提供すること、罹病、治療中から死、そして、死別後をとおしたケアを含んでいる。」と定義しています。これは、こどもホスピスでの緩和ケアは「看取りのケア」だけではなく、「こどもと家族が生きることへのケア」を行うということを意味しています。

2009年にシスター・フランシスが来日して以降、わが国でも小児緩和ケアへの関心が高まり、こどものホスピス・プロジェクト(<http://www.childrenshospice.jp/>)として、こどもホスピス設立への取り組みが始まりました。2012年9月に大阪市立総合医療センターに日本で初めてのこどもホスピスとしてユニバーサル・ワンダールームが開設され、同年11月に、淀川キリスト教病院にホスピス・こどもホスピス病院が開設されました。小児がんの治療中のお子さんにも医療的なケアを提供するだけではなく、お料理できるキッチンや、つらい時には泣くことが出来る部屋、壁に落書きしたり、きょうだいと遊んだりできる空間があり、パーティやイベントなども開いて「もう一つのうち」として、家族や友達と過ごせる場となっています。

また、チャイルド・ケモ・ハウス(http://www.kemohouse.jp/05_shien.html)は、小児がん患者が自分の家のような環境で、家族と共に暮らしながら安心して化学療法(抗がん剤治療)を受けることができる、小児がん専門の滞在型療養施設です。ここも、こどもホスピスと言えるのかもしれない。

淀川キリスト教病院 小児看護専門看護師 平山五月